備中松山城

道

2020年12月1日
（第64号）

スマホの待ち受け画面を覗き見た知人が、「あれえ!!」「かわいい」「どしたん？」と言って笑う。そこでは今年２月に生まれた孫が微笑みかける顔が大写しになっている。「孫の写真を待ち受けにする人の気が知れない」などと言って馬鹿にしていた僕である。なんという変わりよう。▼昔使っていた尺八収納袋を箪笥の奥から引っ張り出して使い始めた。色は褪せ、あちこち擦り切れたりしている。松阪木綿。当時の妻が織って縫ったものだ。何故に今、そんな木綿袋に尺八を入れる。▼三重・松阪の友と久しぶりに再会して静かに語り合った。その時の言葉が思い出される。「子どもに会わなくていいのか」。松阪で別れた子どもたちに。友とその家族は、私たちをずっと気遣ってくれていた。今、癌治療を続ける彼の、「生きる」ことへの思い入れは深い。▼孫の微笑みに癒されたいか。松阪木綿に救われたいか。自分の世界にすがって生きる者にやすらぎはないのだろう。他者のなかに何かを見いだすことこそ大事なのに。「歳をとった」などという言葉でごまかしてはならない。▼「なにもできなくても、見ているだけでいい。なにもできなくても、そこにいるだけでいい」※。一人ひとりを、その傍らでか、スマホ画面でか、心の目でか、どこかから、見ていたい、思っていたい、時を共にしたい。――そんな生き方ができたらいい。

※ 宮地尚子著『傷を愛せるか』より

〒710-1301
岡山県倉敷市真備町箭田 5188
TEL. 090-5366-1497
MAIL michi-care@outlook.jp
H.P. https://michi-care.jimdo.com/
林 道也

遠田　椋の木